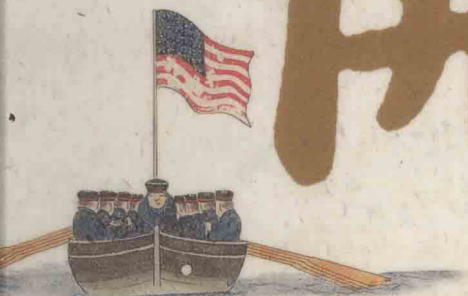


津本陽

tsunmoto-yo

開

國



開 國

津本陽
tsunmoto yo

日本經濟新聞社

開国

一九九三年六月十五日 一刷

津本陽——著者

©Yō Tsumoto1993 Printed in Japan

田村祥蔵——発行者

日本経済新聞社——発行所

東京都千代田区大手町一—九—五 一—二〇〇—六六

電話(〇三)三七〇—〇二五—振替東京三—五五五

印刷・広研印刷—製本・大口製本

ISBN4-532-17029-X

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。

遠雷

黒船

彦根牛

大獄

目次

5

67

202

326

装帧

菊地信義

開
國

遠雷

一

真昼の陽の照りわたる海面は、眼を洗われるような藍碧らんぺきの色をたたえ、おだやかに上下していた。鷗かもめが流木にとまり羽根を休めては、ものうげに翼を煽あおって飛び去ってゆく。

上総かずさ富津の海沿いの集落は、つつじの紅にいろどられていた。

天保十四年（一八四三）三月も末に近い風日和なぎじよりの昼さがりであつた。浦賀水道をへだて、観音崎がかすんで見える。浦賀辺りであろうか、民家の屋根が陽射しを反射し鈍く光っていた。

富津から海辺を南へ十数人の騎馬の侍がむかつていた。

からのすのえんどう、月見草などの茂った野原から、老松の生い茂った集落のあいだの道にはいり、馬を歩ませてゆく。

先頭に三葉葵の紋を染めた小旗を立てた侍がゆく。つづいて竹網たけあじろ代黒漆の陣笠じんがさをかぶり、巧みに手

綱をとっているのは、武州忍十萬石の藩主、松平忠国であった。

黒縮緬上着に黒羽二重羽織、仙台平袴高袴のいでたちで、悠然と胸を張っている。

彼は八代忠翼の三男として生れ、兄の九代忠堯、十代忠彦のあとを継ぎ、天保十二年五月、二十八歳で家督を相続していた。

集落を過ぎると、海沿いに断崖をたらねる高処が見えてくる。

緑樹に覆われた丘の頂きに、幾旒もの旗がひるがえっている。赤、黒、黄、白などの四半の指図旗であった。

「支度をおえておるようじゃ」

忠国はふりかえっていう。

「仰せの如くにござります」

あとにつづく用人杉浦八右衛門が応じた。

陽射しは汗ばむほどにつよかった。

忠国は松林を通りすぎると、新芽をむしって青くさいにおいをかいだ。

忠国一行は丘のうえの御備え場へむかっている。御備え場とは、大筒をそなえた海岸砲台であった。

忠国が幕府から上総海岸の守備を命ぜられたのは、天保十三年八月三日であった。

幕府は川越藩主松平周防守に、三浦半島の天津、走水、観音崎から三浦の郷、三崎に至る沿岸、忍藩には上総富津（千葉県富津市）から竹岡（千葉県天羽町竹岡）に至る沿岸の警固を下命した。

忠国はただちに三百余人の藩士を出張させ、御備え場の築造をはじめた。

富津の陣屋は、四千五百人の将兵が宿泊できる規模のものを建築した。

いったん外夷が上陸してきたときは、総兵力をあげて撃退しなければならないので、陣屋の兵具蔵には四百挺の鉄砲が納められる。

陣屋から十町（千メートル）ほどはなれた御備え場には、鉄製二貫目玉筒一挺、百目玉筒一挺、二百目玉筒二挺が置かれていた。

忠国が江戸から富津陣屋にきて、十日あまりが過ぎていた。

彼はその間に、家老、用人、物頭、番頭、勘定頭らの藩重職をともない、富津から竹岡陣屋までの十里に及ぶ海岸線を視察した。

竹岡陣屋の後方にある城山には、異国船を見張る眼鏡番所が設けられていた。竹岡の番所で異国船の接近を知ると、早馬で富津陣屋に報告が届く。

富津御備え場では砲撃の支度をととのえ、眼下の浦賀水道を通過する異国船に鉛弾を浴びせるのである。

忠国はこの日、二貫目玉筒、一貫目玉筒の試射をおこなうことにしていた。

これらの大筒は延宝年間（一六七三—一六八〇）に購入したもので、およそ百五、六十年のあいだに、数回の射撃を試みたのみであった。

いずれも撃発の性能はたしかであるとの記録はある。

もっともあたらしい記録は、天明四年（一七八四）藩中で大筒撃ちの名人として聞えていた国枝某

が、一貫目玉筒を膝上で発射し、弾丸は三十町を飛んで地面に九尺余りも喰いいったというものである。

見物の群衆はひたすら驚嘆し、国枝は主君より百石の加増を得たという。藩中の故老のうちには、そのときの砲発のさまを実見した者もいて、大筒の威力を褒めたたえた。

「上総海辺の警固をいたすには、お兵具蔵の大筒をお用いなされるが、最上と存じます。私が若年の時分、一貫目玉筒を撃ち放すのを見たことがござりますが、それはもうおそろしきばかりで、異国の船がいかに頑丈といえども、当ればたちまち舷を砕くは必定と存じます」

忠国は大筒をはじめて見たとき、武器方の侍どもが毎日油布巾で拭いをかけている砲身は艶を帯び、頼もしげな外見であったが、はたして使いものになるかと不安になった。

「練兵場へ曳きだし、試してみよ」

「かしこまっております」

一貫目玉筒の口径は三寸、二貫目玉筒のそれは四寸である。

砲身の重量は、それぞれ三十貫、四十二貫で、とても抱え撃ちできるような重量ではない。

忠国は一見して、大砲方に命じた。

「これは土台仕掛けで撃つものであろう。早速に土台をこしらえよ」

大砲方は眉宇を曇らせ、答えた。

「あいにく、弾丸を切らせておりますので、早速に注文をいたしますゆえ、お待ち願います」
「なに、弾丸がないとは緩急ではないか」

「おそれいってござりますが、桑名表よりお国替えの節、重きものゆえ売り払うて参りしものにござりまする」

忠国は口をつぐんだ。

松平家は、三代忠雅が宝永七年（一七一〇）に備後福山十万石から伊勢桑名十万石へ移封され、以来、九代忠亮に至るまで国替えの沙汰がなかった。

徳川家親藩であるため、東海道の要地を固めさせようとの幕府の施策であったが、文政六年（一八一三）に至って、突然武州忍への転封を命じられたのであった。

同年三月二十六日に、江戸からの急使が来着し、桑名城下は士分、百姓町人もともに、うろたえ騒いだ。

百十三年間も住みなれた桑名から、はるか関東の忍への国替えの沙汰に、家督相続して二年を経たばかりの藩主忠亮はおどろく。ただちに江戸家老を通じて、国替え停止の運動を公儀、奥向きにはたらかせさせた。

だが、突然の国替えの理由が判明した。

奥州白河藩主松平乗翁定信が、六十六歳の晩年を迎え、父祖の地である桑名で余生を送りたいとの切願を、幕府に聞きとどけられたのである。

松平定信は天明大飢饉の危機を乗り越え、老中として寛政の大改革を断行した、「幕府宝庫の名刀」といわれる政治家であったが、寛政五年（一七九三）七月、老中を免職させられた。

彼は乱れていた大奥の綱紀をただし、大奥の女中と高野山金剛院真隆の醜聞をあばいて、遠島追放

などの処分をしたため、幕閣にとどまれなくなった。

将軍家斉は定信に反感を抱く大奥の意向を無視できず、彼を罷免するかわりに、桑名への国替えの希望をうけいれざるを得なかった。

このため白河城主松平越中守定永は伊勢桑名城。桑名城主松平下総守忠亮は武蔵国忍城。忍城主阿部鍬丸正権は白河城へ遷移させられることとなったわけであった。

「徳川実紀」には、つぎの記載がある。

「国替えにより落首あり。住みなれし忍をたちのきあべこべに、お国替えとはほんに白河。白川にふるふんどしの役おとし、こんど桑名でしめる長尺。蛤はまぐりのからまで置けと越中が、おし桑名にもくれて下総」

江戸の巷間にはつぎのような落首もあつた。

「忍さまは押し流されて白川へ、あとの始末はなんと下総」

阿部は閹老、松平は御連枝である。

阿部家も九代百五十五年にわたり忍城主であつたので、突然の国替えに狼狽する内情は、松平家と変らなかつた。

松平家家来である歌人黒沢翁満は、二十九歳で国替えを経験した。

彼は「吾妻下り」という国替えの記録で、つぎのように、藩内の状況を記している。

「文政六年三月二十六日、麗日をさいわい翁満は朋友六人に従者を召し連れ、近郊へ藤の花を見にでかけた。一日の行樂を終え、帰つてみると、藩侯が忍へ国替えだという。去る二十四日の発令であつ

た旨の回章なので、家人は皆呆然としたまま、夕餉ゆうけもとろうとしない。さながら遠国へ流されるような思いである。

藩中の騒ぎはいうまでもなく、風説乱れ飛んだ。このたびのことは白河殿の宿望かたが叶えられたので、一朝一夕のものではない。国替え停止の願いをたてたところで、効験こうけんはない。ちょうど武州の人が桑名を過ぎるのをとらえ、様子を聞いたり、ある人は家来をひそかに忍へつかわし、実地を探らせる。

一喜一憂のうちに国替えの支度をし、調度の品を二束三文で売りたて諸費にあてた。(中略) 転封は多人数のことゆえ、幾組にも分け、日をかえて出立することとなった。藩士は一応屋敷を引きはらい、民家に仮寓して出立の日を待つ」

翁満は九月十九日、矢田町の竹内孫兵衛の宅に移った。

転封の支度の最中に、領内に百姓一揆いっきがおこり、諸郡にひろまって藩士は出勤しなければならなかった。

ようやく鎮圧すると、国替えがはじまった。

交通機関のまったくない時代に、千数家、二千数百人が遠路を引越しするのである。

家中からは家老山田大隅以下二十二人を「忍表請取方」として先発させ、忍城下、街道筋の調査をさせる一方、引越し荷物の数をたしかめ、路銀の予算をたてた。

黒沢の記録はつづく。

「九月にはいると白河から城請取りの者が続々と入りこんできて民家に泊し、市内は雑踏した。二十

八日に藩公出立。

十月十日翁満引越しの番となり、父をひとり桑名に残し、母、妻、二弟一妹及び幼女とともに名残りも尽きない桑名をあとにした。

道中つつがなく、二十二日忍に着く。城外谷郷の紺屋惣助の宅に宿し、翌二十三日矢場の賜邸に移った。桑名では百七畳もある家であったが、ここは三十八畳しかなく、随分と住み荒された陋屋であつた。これはただ翁満一家のみではなく、藩中はおよそこれとおなじ事情であつた。なにしろ藩士の屋敷がすくなく、半数は宿無しの有様であつた」

阿部家は士分三百九十一人であつたが、松平家の家来はその三倍をこえる人数である。

東海道、中仙道を十二泊、百十里の旅をかさねてきた藩士たちに野宿をさせるわけにはゆかない。屋敷をあてがわれない者は、いったん民家を宿とさせ、侍屋敷の大増築にとりかかった。

城下には東照宮、別当金剛寺、天祥寺、桃林寺、大蔵寺を建立する。

これらの大規模な建築工事をふくめての、国替えに要した費用は十両にのぼつた。

平時は不要とされる大筒の鉛弾を売り払つたのは、当然の措置であつた。

忠国は富津御備え場に常備する大筒は、一挺につきすくなくとも百発の砲弾を用意しなければならぬと考え、鉛弾と煙硝、口火に用いるドンド口硫黄を調達させるため、武器支配役を江戸へ走らせた。

ところが砲弾、硝薬が容易にととのわない。硝石などは長崎まで注文しなければならないという事情が分つた。

忠国はやむなく、弾丸火薬を添えず五挺の大筒を将兵とともに富津へ送った。送付のまえに彼は蘭医河津省庵^{せいあん}を城中に招き、大筒をあらためさせた。

河津省庵は相模相原（相模原市）の人である。寛政十二年（一八〇〇）生れで、天保十三年（一八四二）には不惑をこえた年頃であつた。

彼は長崎でシーボルトから洋方医学を学んでいた。忍城下へきたのは、彼の漢学の師であつた芳川波山が、藩校修脩館の館長となつていたためである。

波山は十九歳のとき伊豆下田で塾をひらいてのち学名たかく、忍修脩館に招かれたのは、文政八年（一八二五）であつた。

省庵は忍城下をおとずれると、仲町の漢方薬種問屋で町若年寄をつとめる大島屋喜兵衛の店に立ち寄り、幾種かの薬剤を買ひもとめておいて尋ねた。

「お城下に芳川波山という漢学の師匠がおられると聞いたが、主殿^{あるじどの}には存じておられようか」

「波山先生なら、修脩館におられる名高いお方でいらつしやいます。お客さまは先生の知る辺でいらつしやいましょうか」

「うむ、僕は波山殿が伊豆におられしときの弟子じゃ」

省庵は波山をたずね、その縁で忍城下に住むこととなつた。

省庵に住居、医療器、生活のすべてにわたる世話をしたのは、大島屋喜兵衛である。

省庵は喜兵衛の見込んだ通り、患者の治療に洋方医学の神技をあらわし、たちまち門前市をなす流行医となつた。

芳川波山は藩主忠堯に呼ばれ、省庵の来歴を聞かれた。

「省庵ははじめ江戸にて漢方薬餌につき勉強いたしおりましたが、のちに悟るところあつて西洋の医術に志し、蘭医宇田川榛斎しんさい、緒方洪庵などの名流に教えをうけました。さらには長崎におもむき、蘭医シーボルトに就き刻苦勉勵の日をかさね、全国を漫遊して医術百家の諸説を聴問し、洋方治療の蘊奥うんおうをきわめしものにござりまする」

忠堯は省庵を侍医として招聘しょうへいした。

従来しゆらいの藩医は、草根木皮の薬剤調合のみを事とするのにくらべ、省庵の医術の効果は、眼をみはるばかりである。

シーボルトがもたらしたオランダ医学は、内科、外科ともに病源鑑別、診断、治療を人体病理に従いおこなう。

外科の技法も発達しており、産科手術も驚くばかりに進歩していた。

舶来はくがいの貴重な薬品も数多くもたらした。

醋酸さくさんモルヒネ、硝酸ストリキニン、ウエラトリン、シンコニン、草寧こねい、琥珀酸こはくさん、硼酸ほうさん、クレオソート、亜砒酸、硝酸銀、第一沃汞やくぐう、第二沃汞などである。

シーボルトが文政九年（一八二六）に江戸へ来たとき、江戸城西丸奥医師として將軍の身邊に侍っていた土生玄碩はぶげんせきが面会し、眼科学につき種々質問した。

そのときシーボルトは莨菪はしりどろという植物から製した瞳孔散大薬を白内障患者にもちい、効果を示した。